

プロローグ

森の夜は思ったよりも静かだった。

鳥も虫も、風すらも。焚き火のはぜる音に遠慮するように、物音ひとつ立てていない。

古びた山小屋の軒先。粗末な石組みの囲炉裏を囲んで、俺、カイ・ヴェルナーは鍋をかき混ぜていた。

「カイって意外と丁寧なんだね。ほら、料理とか」

尻尾をゆらゆらと揺らして、テイルが覗き込んでくる。獣人の娘だ。小柄で快活、目元に好奇心を隠しきれないタイプ。たぶん一番年下なのだろう。

「や、まあ……商人なんで。旅先で、腹をこわしたことがあったのでより丁寧にしてるんすよ……」

冗談めかして肩をすくめると、テイルがケラケラと笑った。

「食べて復讐されたのか。わかるー。あたしもこの前、川魚でやらかした」

その笑いに、ほかの三人もつられて笑う。

サーシャは火の向こうで目を細めていた。静かな魔法使い。艶のある黒髪をきれ

いに結び上げ、真紅のマントが光を返していた。

「カイさん、素材の活かし方がお上手ね。山芋を煮込んで甘味を出すのは、なかなかの工夫よ」

「いえいえ、お褒めいただき光栄です」

その隣で、ラルドが腕を組んだままうなずいた。女戦士。筋肉質で逞しい体格。声は低く、言葉少なだが、落ち着いた風格がある。

「助けた相手に礼を尽くす……あたりまえのことを、きちんとする男だな」

「恐縮です」

頬を搔きながら、俺は笑顔で応える。

奥にいるエルフの娘、ミラは切り株に腰をかけて、静かに手を合わせていた。金の髪が焚き火の光に透けていて、どこか神々しさすら感じさせるが、話すとごく普通の穏やかな女性だ。

「こんななにぎやかな夕食は久しぶりだよ」

ふんわりとした声が、夜の空気に溶けていく。

まったく。いい連中だ。信じ込みやすくて。警戒心が薄くて。

ほんの少しの言葉と、温かい食事と、弱々しい笑顔で。

俺をすっかり仲間と認識してくれる。

その信頼が、たまらなく愉快で滑稽で、心地よかった。

(…さて、と)

俺はひとつ、鍋の中を確認するふりをして身をかがめた。背を向けたその手のひらで、小さな瓶の蓋を開ける。

無色、無臭。だが、効き目は保証付き。

ひとすくい、そつと鍋に垂らす。音も、湯気も変わらない。

「おまたせしました。そろそろいい頃かと！」

大げさに声を張って、ひとつずつ器によそっていく。全員が俺の目の前で口にしたのを、しっかり確認する。

「ん、おいしい！ あったまる！」

「いい味ね」

「これ、お店でも出せるんじゃない？」

「…ほんと、旅の途中ってことを忘れそうだ」

笑い声とともに、空気がふわりと緩む。

俺もその輪の中に加わったふりをしながら、背中のポーチにそつと手を伸ばした。

小さな銀の笛。それを短く吹く。

音域は、人間の可聴範囲には届かない。

しかし、魔族の耳には届く。俺が、合図を出したことが、伝わったはずだ。焚き火の周囲は、しばらく何も変わらない。

テイルがご機嫌で食事を口に含んでいる。ラルドは姿勢を変えず、じっとあたりを見回している。サーシャはスープを口にしながら目を閉じ、ミラは何かを考えるように空を見ていた。

そのとき、草むらが、ざわっ、と音を立てた。

「……っ！」

ラルドが先に反応した。剣に手をかける。サーシャも一瞬で詠唱体勢に入り、ミラは素早く立ち上がり、テイルが耳をぴくりと立てた。

「なにか来る……！」

その言葉の直後。木々の陰から、巨大な影が現れた。

オークだ。全身に瘤のような筋肉を抱え、腰に鈍器を下げた怪物。人間の二倍近い体格だ。

「……構えろ！」

ラルドの号令が飛ぶ。全員が一斉に戦闘体勢を取った。

焚き火の光にあてられて、剣が、杖が、弓が閃く。

だが、最初に異変が訪れたのは、テイルだった。

「……えっ、な、なに……？ あ、あし……っ」

膝が笑い、尻尾がピンと跳ね上がった。その身体が、小刻みに震える。

「え……え、やっ、あっ、やだ、あああっ……！！」
しぶき。

獣人の身体が、膝から崩れ落ちた瞬間、股間からピュツと水音が弾ける。

腰を引きつらせ、涙を滲ませながらティルはわけもわからぬまま痙攣していた。

「……なに、して……っ、ティル……！！？」

サーシャが駆け寄ろうとした、その足が止まった。

「っ……く、あっ……あ……あああっ！」

同じように彼女の脚も震えだした。

(……ふふ)

目の前の光景に、胸の奥がじんと熱を帯びる。

始まった。さあ、ここからだ。

ティルに続いて、サーシャが崩れ落ちた。静かな魔法使いのはずが、口元から甘ったるい声がこぼれている。

焚き火の光が彼女のローブ越しに、水を吸って染まる布の色を映し出す。

「あ、な……なにこれ、やだ、やだっ……」

膝が勝手に抜けていく。熱い、熱い、と。彼女は自分の胸元を掴むが、どうすることもできない。

「う、そ……っ、まって、ちがう……っ」

ミラも、もう立っていられなかった。

エルフの細い足が内股に力を込めきれず、ぶるぶると揺れている。白く細い指が腰布をつかむが、間に合わない。

しゅっ。

そのまま彼女も、濡れた音を立てて崩れ落ちた。

「……お前、まさか……」

女戦士ラルドが、俺を見た。他の三人の状況を見て、それでも踏みとどまっていた戦士。

だが、その目には既に恐怖があった。俺はその視線に向けて、ただ笑う。薄く。ゆっくりと。

焚き火の橙を顔に受けながら、これまでの俺とはまるで違う笑みを浮かべて。

「……まあ、楽しんでくれよ」

ラルドの視線が、ぐっと俺に突き刺さる。

俺はそれに怯まず、むしろ愉快そうに顎をしゃくってみせた。

そしてゆっくりと、ラルドの股間を指で押し込んでやる。
それだけで。

「っ、あ、や……っ、あああっ！！」

崩れた。あの剛胆な女戦士が。剣を抜いたまま、腰を砕いて、絶頂に果てた。
全員、濡れていた。衣服の上からでも、はつきりとわかるほど。

蒸れた音、柔らかな声、目に浮かんだ涙。

羞恥と、困惑と、絶望の混ざった顔。

「や……だ、やだよ……カイ……っ」

ティルが涙声で俺を見た。無垢で、誰よりも信じてくれていたあの目で。

「カイ……あなた、まさか……」

サーシャの唇が、震えている。

「いや、いやだ……っ、なんで、なんでこんな……っ」

ミラが服の裾を握って、身体を丸めた。

「ふざけ……るな……」

ラルドは、声を押し殺しながら、脚の間から流れる熱を止められずにいる。

俺は焚き火からゆっくりと離れていく。

もう「気のいい商人」はいない。代わりに立っていたのは、裏で魔族と取引し、

冒険者を売って来たブローカーだ。

「……はあ」

大きく、ため息をつく。その音すら、もう仮面ではない俺の素が滲んでいる。

「お前たち、いま最高に“いい商品”って顔してるぜ？」

焚き火の音だけが、静かに燃えている。

誰も動けない。涙だけが頬を伝い、脚元には恥と恐怖とが残されていた。

「それじゃあ、いい夜を」

俺はそう言っ、山小屋の扉を開け、中に入っ、いった。

山小屋の奥に置かれた年季の入った椅子に、俺はどかりと腰を下ろす。

腰にぶら下げていた革袋を口に運び、酒を一口。

喉の奥に焼けるような熱が走る。

悪くない。口の端に浮かんだ笑みを、無精髭の上でなぞるように拭った。

窓の外で、焚き火がゆれている。その横に、四つの影。いや、八つか。

女たちと、オークたち。

相変わらずでかい。肉も腕も、ぶら下げているブツも……ああ、あれじゃ中まで

突き上げられるわな。

テイルの小さな背が焚き火の向こうで跳ねるたびに、くぐもった声が木壁越しに

届く。

「っ、いやっ……やだ、カイさんっ、助け……っ、ひぁ……っ！」

ああ、助けてほしいのか。

だが俺は椅子に座ってる。酒もあるし、足も投げ出してる。

何より、その状況を作ったのが俺なのだから、助けるはずもない。

俺の名前はカイ・ヴェルナー。一応、人間の国で交易商として登録されている。

各地を巡って物を運び、買い、売り、仲介し、金を稼ぐ……表向きには、な。

だが裏では、ずっと別の顔で生きてきた。

若い女冒険者、奴隷、捕虜。売れる者なら何でも売る、魔族専属のブローカー。

……とはいえ、最初からこんなうまくいったわけじゃない。

魔族と人間の関係なんて、表沙汰になりや首が飛ぶ。それでも“彼ら”が欲しが

る限り、“こちら”が運ぶ価値はある。

最初はね、こっちもびびってたんだよ。怖いし、でかいし。食われるかと思った

し。

でも気づいた。

魔族って、案外エロいもんが好きなんだ。

ただ殺すだけじゃつまらない。怖がらせて、壊して、泣かせて、イかせて、狂わ

せて。それが面白いらしい。

「やっ、やだっ、うそ……っ、こんなの、入るわけ……ひぎいっ……!!」
誰だ？ ああ、ラルドの声か。

戦士としてはあんなに力強かったからすぐには折れないと思ってたんだが、声
もう上ずってる。

窓の外で、焚き火に照らされた横顔が一瞬、見えた。髪は乱れ、唇からは涎が
うっとうと垂れてる。

自分の腰がどう動いてるか、本人が一番信じられないって顔だ。

俺はくつくつと笑った。

「まったく、威勢だけはよかったのになあ……」

そして、そう。この遊びを考えたのも俺だ。

俺が初めて魔族に女を売ったのは、二〇年前のことだった。

崩れた冒険者ギルドの再建事業に乗じて、孤児あがりの女兵士を魔族に引き渡
した。

見返りに得たのは金貨三〇〇枚。そのとき思ったんだ。

人間の価値なんて、結局、声と穴だ。

それからは早かった。処女か、熟れごろか、泣き声は高いか、口は軽いか、壊れ

やすいか。

情報を集めて個体を選別し、魔族へと流した。

ただ、もっと面白いことはないかと考えたのも、また事実。

普通に売るだけじゃつまらない。もっとこう劇場的に、見世物として、エロく、滑稽に。

そこで生まれたのが、【魔族の遊戯迷宮】だ。

餌を撒く。女たちを迷宮に誘う。そして捕まえて、鬻る。犯す。イカせる。

気絶させた女を魔力で回復させ、体も意識も元通りにして、また逃がす。

必死で逃げた先で、また捕まり、また鬻られ、また絶頂して。

出られそうでは出られない、夢の快樂迷宮の完成だ。

「や……あつ、もう……いやあ……！」

「やめ………お願い、もう、もたない………っ！」

「ふざけるな、カイ………っ！ あんた、あんたあ………！」

焚き火のそばで、彼女たちは次々に声を上げる。

でもそれは怒鳴り声じゃない。もう、声ですらない。

泣きながら。

脚を開きながら。

声を裏返して。

俺の名前を何度も、喘ぎ交じりに呼ぶ。

「ふっ……はは……」

思わず吹き出してしまった。

気のいい旅商人を信じて、警戒もせず、夜に背中を預けた女たち。それが今や火の向こうで獣たちに喰われて、汗と涙と涎を垂らしてる。

その様子を、俺は酒を飲みながら眺めてる。

最低だって？

……ああ、そうだよ。だけどな、俺は女の“嫌だ”って顔が一番好きなんだ。

怒りとも、困惑とも、絶望ともつかないあの顔。

歯を食いしばって泣くくせに、脚が勝手に開いて。

自分でも知らない声が出て、なにより「どうして？」って俺を見る目。

「どうして？」だって？ 知らねえよ。てめえが勝手に感じてるだけだろうが。

窓の外。焚き火の揺れる赤に、戦士ラルドの表情が一瞬浮かぶ。

半開きの唇。首を仰げ反らせた姿勢。

オークの腕が、その身体を深く沈めるたびに、彼女の眼差しはどこか遠くを見つめていた。

「っ……ひっ、ひあ……っ！ あ、あああ……！！！」

甘く、壊れた声を上げて、果てた。

また一人、いい売り物になりそうだ。

俺は残った酒を一口、ぐいっと呷った。ぬるくなってきた酒が舌の奥に残る。

でもそれすらも、妙に美味く感じた。

それからしばらく喘ぎ声と泣き声が聞こえてきたが、静かになってきた。

窓の向こうで、オークたちが女どもを連れていく。

テイルは両脚を引きずられ、しっぽが濡れた腰の下でだらりと垂れている。

サーシャの手からは杖が転がり落ち、ミラは軽い身体をずると引かれ、

ラルドは……まあ、一番重そうだったな。肩に担がれたまま白目を剥いている。

全員、口を閉じる力も残ってねえ。

どうせ途中で目が覚めても、またすぐぶちこまれるだけだな。

かわいそう？ ははっ……違えよ。むしろ幸せじゃねえか？

「気持ちよくイカされて、意識失って、何も考えずに運ばれてく。ある意味、極楽

だろうよ」

俺はそう呟いて、笑った。

だってそうだろ？ あいつら、街に戻って生き延びたって、何が待ってた？ 誰

が褒める？

飢えて、誰かに売られて、報酬で安い酒飲んで、翌日にはまた魔物に追われて、仲間が死んで、悔やんで、でも生きるためにまた旅に出る。

だったら今みたいに、ただイって、濡れて、媚びる声で喘いで、壊されて、また回復されて、またいくほうがよっぽど存在価値があるだろうよ。

それにあいつらの泣き顔、最高だったしな。

——ドスツ。

その音と共に、小屋の入口の地面が沈んだ。

「……おっと」

立ち上がり扉を開けると、そこには予想通りの皮袋。金貨の音が中で気持ちよくぶつかり合っている。

やつらも、律儀なもんだ。最初に交わした約束通り、四人まとめて一人五百。合計で二千。

あれだけの上玉だ、特別料金がついていてもおかしくない。袋の口を開けて、ざらりと手を突っ込む。金貨の感触。温い皮の内側。にやけそうになるのを抑えきれ

ない。

「いい払いっぷりだな……はは、まああいつら、上物だったしな」

袋をしつかり結び直し、肩に担ぐ。とたんにはずしりと来る重みが、今回も良い仕事だったと告げてくる。

「ほんとよ、ありがてえよ……声までよかったし、潮の飛びも見事だったし……ははっ、まるで見世物小屋だな、ほんと」

さっきの光景を思い出す。

股を押さええて崩れ落ちるテイル。腰を跳ねさせながら泣いてたサーシャ。

脚を閉じようとして閉じきれず、じんわり濡らしていたミラ。

そして、最後まで睨みつけようとして、結局最初に果てたラルド。

無様って言葉があれほど似合う女たちもいなかったな。

俺は、金の袋を背負ったまま、ゆっくりと歩き出す。

森の夜は静かだった。人の声はもうない。

その代わり、遠くのほうで、オークの笑い声が木霊していた。

ああ、あれはたぶん、また誰かが潮を吹いた音でも聞こえたんだろう。

……まったく。ほんと、いい夜だった。

◆ ◆ ◆
この仕事は、もう何度繰り返しただろう。

焼け焦げたマント。傷だらけの肩。絶妙な加減で破かれたズボン。魔族に襲われて、かろうじて逃げ延びた、という芝居のための衣装は俺の荷物の中で一番有効価値が高い。

街道沿いの森。その入口で、偶然を装って声をかける。

女二人の小パーティ。呪術師とアルケミスト。

実力はそこそこ。見た目は地味め。こういうタイプは、媚薬であっさり壊れる。崩れた時の落差が愉快だ。

どちらに転んでも、魔族にとっては上玉。

「……助けてくれて、本当にありがとうございます。街まで、ご一緒させてください……」

情けない男を演じながらお礼を言うと、二人とも、静かにうなずいた。どこか影を落としたような声。それが最初は妙に引っかけた。

(……まあ、そういう性格なんだろう)

女は明るいばかりじゃない。黙ってるやつが、喘いだとき一番うるさいもんだ。むしろ、そっちのほうが客ウケはいい。

そして今、俺たちは森の奥の山小屋にいた。

毎度おなじみの舞台装置。焚き火のそばで煮込むスープに、例の瓶から数滴を落とす。

無味無臭のあの薬。料理を器に盛って、二人の前に差し出す。

慎重に様子を伺っていたが、彼女たちは静かに口をつけた。

今日も成功だ。あとは、笛を吹くだけ。

俺は小屋の影で、小さな銀笛をひゅつと吹く。

いつものようにオークが現れ、女たちが勝手に絶頂し、犯させてお持ち帰り。

そう、いつも通り。その、はずだった。

「……オンナ、キイテナイ？」

「シオ……マダダナ」

オークの野太い声が、静かに響く。俺は思わず眉間にしわを寄せ、女たちの方を一瞥した。

「……ん？」

様子がおかしい。

いつもなら、もう股からびしゃっと噴いて、膝から崩れ落ちている頃だ。
なのに、静かすぎる。

(…：薬が、効いてない？ いや、まさか)
女たちは確かに膝を震わせていた。
けれど。

「…：あぁっ…：…っ」

喘ぎが、漏れている。しかし、まだ絶頂には至っていない。

顔が赤い。息も荒い。だが限界まで耐えている。ぎりぎりのラインで、恥を抑え込んでいる。

(くそ、こいつら…：薬に耐性があるのか!?)

「カイ…：イツモトチガウゾ。ドウスル？」

「っ！ …：馬鹿野郎！」

オークの野郎、馬鹿正直に俺の名前を口にしやがった。

早い。早すぎる。

もう少しで崩れそうなのに、余計な一言で空気が変わる。

案の定、呪術師が俺を見る。眉をひそめ、目を細め、その視線に冷たい警戒が走

る。

アルケミストの指先が、ポーチに触れるのが見えた。

あの動き。何かする気だ。

「待て、落ち着け、これは」

俺が言いかけた、その瞬間。

——びしゃっ。

アルケミストから透明な液体が、俺の顔に、首に胸元に、ぶちまけられた。

「……っ！」

熱い……いや、冷たい？　ちがう。ヒリつく。

肌の下から、ぞわりと痺れるような違和感。

なんだ。なにをした。これは……なにを……

そのときだった。

視界の端で、呪術師とアルケミストが、同時に崩れ落ちた。

「ひっ、やっ……あ、あああ……っ……！」

「とめら、れ……な……いつつ……！」

潮が噴きでた。俺が期待した通りの、豪快な、見事な絶頂。顔を反らし、涙を滲ませながら、二人は地に膝をつき果てた。だが、そのとき。

俺は、すでに背を向けていた。

「オークども……これで……いつも、どおりだ……！」

足元がぐらつく。喉が焼けるように熱い。

服の内側が蒸れる。汗とは違う、体内から溶けだすような熱が、俺を焦がす。

これは……これは……っ！

（まずい、まずいまずい……！！）

小屋の扉が遠く見える。逃げ込まなければ。

何もかもが崩れ落ちる前に。頭の芯が、じんじんと煮える。

膝が笑って、ろくに前が見えない。息は浅く、胸が……いや、胸がなんだ？

……わからない。ただ、熱い。

首の内側、腹の奥、背骨のあたりから、何かが内側を這いずるようにじゅくじゅくと広がっていた。

手足の指先まで、微熱に似た別の何かが回っていく。

（な、んだ……これ……っ）

息を吐くたび、喉がくすぐったい。声が、妙に高く響くような気がした。

小屋の扉まで、もう数歩。それなのに、距離感がうまく掴めない。

視界の外。あの焚き火の向こうで、私たちの声が弾けていた。

「っ、あっ、いやあっ……いっっちゃう……う！」

「ダメ……ああっ、やあっ、壊れ、ちやう……っ！」

さっきまで冷え切っていた呪術師とアルケミスト。

今は声を裏返しながら、交互に甘い声を上げている。

（くそっ……やっど効いたってのに……なんで、なんで俺が……！）

ぎゅつと奥歯を噛む。

でも、歯が、カチツと鳴っただけで、どうにも力が入らない。

指の感覚もおかしい。

何か、細くなつたような……そう、細く、繊細で、震えやすくなつたような……

ふらつく体を壁に預けるようにして、小屋の扉に手をかけた。

けれどその瞬間、視界が、ぐにやりと溶けた。

「……く、そっ……」

そのまま、ゆっくりと膝をつく。木の床の冷たさが、ひどく遠く感じられた。動けない。頭がぼんやりと薄れていく。

遠くで、何かが動く音。足音。低いうなり。嗅ぎつけるような鼻息。オークたちがやってきたのか？

けれど、もう俺は立ち上がれない。

身体の奥から、なにか形そのものが、じゅわじゅわと溶けている。

内臓が、骨が、再構築されているような……そんな不快で、でもどこか痺れるような感覚。

そして聞こえてきたのは、オークたちの声だった。

「オンナ、サンニンダッタカ？」

「フタリダロ……？」

「ダレダ……？ デモ、オレ、コノオンナ、ヤリタイ」

「ジカンナイ。トリアエズ、ツレテイク」

やめろ。

やめろ。

俺はちがう。

俺は……女じゃねえ……ツ！

「やめ、ろっ……ふざけ、んな……っ」

声にならない声が喉を震わせた。

けれど、

ぬるりと背中に回る腕と、獣のような体温に包まれて、俺の身体は、宙に浮いた。

肩を担がれて、運ばれていく。

視界の端に、焚き火の残り火が揺れていた。

(……くそ、しくじった……)

俺の意識は、ゆっくりと深い闇に沈んでいった。

※続きは本編でお楽しみください。